若越郷土研究　六十六巻二号

# W・E・グリフィスが昭和二年に訪れたホームズ宣教師一家について

布施田　哲　也

## 一　「グリフィスには、まだまだあります」

グリフィス研究の第一人者山下英一は、そう語った。三十代の頃よりグリフィス研究一筋でグリフィスに関する著作[1]があり、若越郷土研究にもグリフィスに関する多くの論文を発表している。グリフィスの八十四歳の人生よりは長生きしたいと常々語っている山下英一は八十七歳、グリフィスの年齢を超えた。現在病気療養中で、室内移動は車いすの助けが必要であるが、首から上は一点の曇りもなく博覧強記、該博な学者そのものである。

明治時代初期に福井藩の外国人教師として、最先端の化学や英語を教えた米国人グリフィス（一八四三―一九二七）の福井来訪百五十年を記念した特別展『グリフィスが見た明治の福井』が、二〇二一年三月より五月にかけて福井市立郷土歴史博物館で開かれた。特別展のパンフレットをもって一年ぶりに山下家を訪問した際に、パンフレットを見ながら先生は語り始めた。

「一九二六（昭和二）年、グリフィスは五十六年ぶりに福井を訪れますね。若き日の教え子の吐酔（今川吐酔）にも再会し、各地で講演会をして、三秀園での写真も残っていますね。福井を去る前日、江戸町のホームズ宣教師宅を訪問しています。グリフィスは宣教師ですから、そこを調べないといけません」「福井の人は、宗教というとけむたそうにするけれどグリフィス理解にキリスト教はかかせない」

お雇い（オヤトイ）、学校の先生というイメージが強いグリフィスは、アメリカでは文筆活動と牧師をしていた。福井でも生徒と共にマタイ伝の読書会をしていたことがグリフィス日記よりわかる。しかし若き日のグリフィスは賢明で、キリスト教伝道は西洋文明の普及と共にと感じていたが、福井は浄土真宗の仏教王国、曹洞宗の本山永平寺もあり、教師としての活動を優先させた。グリフィスが福井に残した足跡が称賛されるのは、宗教色をきわめてうすめた活

動によるところも大きい。グリフィスに関する研究は多いがホームズ宣教師についてのまとまった記録は見当たらない。ホームズ宣教師は私が通った栄冠幼稚園とも深い関係があり、グリフィスが特別に訪ねたホームズ宣教師一家について報告する。

## 二　『かみさまありがとう』

栄冠幼稚園の七十五周年記念誌『かみさまありがとう』によれば、栄冠幼稚園の母体である日本基督教団神明教会は、一八九〇（明治二十三）年カナダ・メソジスト教会のダニエル R. マッケンジー宣教師が来福し開設した日本メソジスト福井講義所を始まりとする。一九一四（大正三）年から一九三七（昭和十二）年まで福井に派遣されたホームズ宣教師の妻エミーは、栄冠幼稚園の園長をつとめた。当時の福井ではホームズ宣教師は日本語で神の教えを説く白髪の宣教師として知らない人はいないというほどの有名人だったらしい。また神明神社の大祭では、神社近くにあった婦人宣教師館の前で、お祭り伝道と称して、讃美歌をうたい道行く人に路上伝道をおこなっていたことでも有名である。カナダ・メソジスト教会は、豊富な資金と優秀な宣教師や幼稚園教師を北陸の地に送り込み福井にも多くの信者を獲得した。記念誌の中で、山口和克は次のように指摘している。

「開国直後から、日本全国に、北陸の町に到るまで、宣教師を派遣し布教活動をつづけたアメリカ、カナダミッションの情熱には、全く敬服の他ありません。（略）　日本文化史にとっても重要な研究課題であるとおもいます（略）　記録にとどめる必要があります」[2]と述べている。山口和克は栄冠幼稚園を卒園され東大医学部卒業後病理学者になっている。

## 三　ホームズ宣教師“Victoria Eight”の一人

ホームズ宣教師（Charles Parsons Holmes）は、一八七五年カナダ生まれでカナダ・メソジスト教会宣教師として、一九〇六年に来日した。東京・静岡・浜松にて伝道をおこない、一九一四年より一九三七年まで福井で伝道活動を続ける。妻はエミー（栄冠幼稚園や丸岡の緑幼稚園初代園長）、子どもはルース・エレン、チャールズ、ジョンの一女二男の三人である。長女のルース・エレンは一九〇七年に静岡で、長男のチャールズは一九一〇年に福井で、次男のジョンは一九一八年に福井で生まれている。

ホームズは一九〇六年にカナダビクトリア大学を卒業、カナダ・メソジスト教会より“Victoria Eight”の一人として一九〇六年十一月中国・日本へのキリスト教伝道に派遣された。八人の中で日本伝道に携わったのはホームズ一人であった。

カナダ・トロントユニオン駅から、

“Hong-Kong, Jah-ding, Heart of Sz-Chuan, Chung-king, Hankow, China and Japan, Wu-Chang, Chentu, Yang-tse-kiang, Victoria! Victoria's Missionary Gang !”

〝香港、楽山、四川の都、成都、漢昌、シナと日本、武漢、成都、

ホームズ宣教師一家　（一九二二年頃と一九二八年頃か）
妻エミー　次男ジョン　ホームズ宣教師　長男チャーリー　長女ルース・エレン

長江、ビクトリア、ビクトリアの宣教師団！〃の歌と共に八名が海外伝道に送り出されたという記事と写真が残っている。[3]

一九三七年七月に起こった日支事変がだんだんエスカレートして国際情勢が極度に悪化し、カナダ・メソジスト本部から宣教師の引き上げ命令が出た。ホームズ宣教師一家は、足掛け二十四年福井でキリスト教の伝道に尽くした。その他敦賀、大野、勝山、松岡、丸岡、金津、三国等で福音伝道をおこなっている。一九一五年には丸岡講義所を開設し丸岡の地で定期的に伝道集会を持った。一九二六年には武生伝道所を開設した。[4]

ホームズ宣教師（一九〇六年）

## 四　カナダ・メソジスト教会　ジョン・ウェスレー

英国国教会のジョン・ウェスレーは、キリストの福音は礼拝堂の中だけではなく社会のあらゆる場所で語られ、あらゆる階層の人々にもたらされる必要があると考えた。〃世界はわが教区なり〃というウェスレーに始まる「伝道」はメソジスト運動の特色であり、メソジスト教会の伝統となった。メソジストは、聖書に書かれている方法（メソッド）を大切にし、自分の生活のすべてが神のために役立つように多くの規律（メソッド）をさだめた。メソジストには「几帳面」という意味もある。特にカナダ・メソジストは都会より地域での巡回伝道を得意としていた。一九〇〇年当時のカナダは、大部分が大英帝国の植民地状態であり、カナダ・メソジスト教会では結成五十周年（一八七一年）を機会に、海外伝道特に日本や中国への宣教をはじめた。当時香港は大英帝国の統治下で、またバンクーバーから香港へは定期汽船が走っており大英帝国の大切な航路の一つで

あった。ホームズら“Victoria Eight”の人々は、バンクーバー発横浜経由の香港行きの“The Emperor of China”号にて横浜に到着している。北陸三県は、特にカナダ・メソジスト教会が中心となった伝道が盛んにおこなわれた。

## 五　ホームズ宣教師の日本観、仏教観

ホームズ宣教師は、次のように来日後の感想をのべている。

「新しい民主主義の流れがおこりつつある。道行く人々は考えることを始めており、思慮深い人はクリスチャンになっていくだろう。一年半前、大隈重信伯は、新しい天皇の御代は、時代の転換期となり民主主義の発展がみられるであろうと話している」

ホームズ宣教師は、仏教に対してより寛大な態度の表し方を追求していた。一九一〇年代に彼が書いた『今日の日本への伝言』によれば、宣教師の仏教信者に対する態度は、もっと彼らの仏教信仰をそこなうことなくその信仰にも共感を示すべきと述べている。キリスト教が説く教理はすべて仏教の聖典にもみられ、仏教では神に対して別の言葉を使用していて、贖罪こそないものの神の生まれ変わりや三位一体といったキリスト教が説く教義に似たものはすべて内包している。贖罪がないという理由で、キリスト教を仏教よりも優れている宗教と主張するのはすこし単純すぎるかもしれない。キリスト教の優位は東洋と西洋の違いを超えて示されておらず、未信者からの難しい質問に直面する宣教師たちには西洋文明の優位性をもってキリスト教の優位性を説くのは適切ではないと述べている。多くの宣教師たちの中には仏教に対して明らかな敵対心を抱くものも少なくなかった[5]。

神明教会の活動の中でホームズが印象深い出来事として比較宗教の研究講座の開催をあげている。平田平三（青山学院大学理事長）とアームストロング（カナダ・メソジスト教会の婦人宣教師として来日、戦前に日本人に帰化して終生富山で幼稚園運営にかかわった）が講師で一週間開催され多くの僧侶の参加があったという。

## 六　ホームズ宣教師の福井での活動

サビーによる『日本におけるカナダ・メソジスト教会の展開』（メソジスト五十周年記念）一九二三年発刊[6]のなかに伝道地の一つとして福井の記載があり、ホームズの活動の一部が以下のように紹介されている。要約して記載する。

〝福井は、徳川時代親藩として松平家が代々納めていた。一八六八年の明治維新の際にはグリフィスが来ており、福井での経験もふまえて『The Mikados Empire（皇国）』が書かれた。福井の人は、松平家の御代の影響か分別のある人が多い。富山の人ほど不愛想ではなく、荒っぽくもない、福井の人は抜け目がなくて賢く商才がある。現在福井には来福七年目のホームズ宣教師があらゆる機会をとらえて伝道を展開中である。

仏教信者の中には、浄土真宗のお経を毎日唱えているものの、意

味のある文ではなく、何をとなえているのかわからないという人が多い。身内が死んでも、意味が分からないお経をとなえられてありがたがるだけでは、死んだ人は本当に幸せなのかわからない。聖書には神に対しての明確な教えがあり、こちらのほうがよく理解できるという若い学生は多いという。また日本の人々は偶像崇拝を重んじることが多く、仏教徒の中には奇跡の水というものを信じ、自分の痛いところと同じところをさすって病抜けを仏に祈願する信仰も根強く、本物の教育がいきとどいているのか疑問である。この地での伝道を一番困難にしているのは浄土真宗の隆盛にある。しかしながら、これまで一般的だった禅宗が、蓮如によって浄土真宗が優勢になっていった歴史もあり、キリスト教が多くの人に福音をとどけることも可能であると考えている。〃

火事で神明教会が焼失した際には、カナダ・メゾジスト教会本部や信者よりの浄財をあつめ新教会の建立をおこなった。ホームズは、「福井メソヂスト教会は、その会員に有力な市民をもちその立場において各々キリストのよき証人として御用にあたりまわりの人々によき感化を与えておられます。ますます福音伝道について各自心を用い祈りを常に怠ってはなりません。福音伝道は教会存立の核心であります。これなくして教会存在の意義はない」とのべている。(7)

## 七　斎藤静と阿部倹司

斎藤静は福井中学の英語教員でグリフイス来福の際、通訳をしている。阿部倹司は大正末より福井中学、その後武生中学の教師をしており、英語教師の斎藤静の一番若い弟子でもあって、ホームズとも親交があった。ホームズの文章の翻訳も阿部はおこなっている。

阿部倹司は、若くして亡くなるが多くの詩を残している。彼の死後七十五年を機に彼の詩集『死と生のあいだで』が発行され序文を山下英一が記している。ホームズ宣教師と阿部の交友を次のように

ホームズ夫妻（一九三〇年）

記載している。「市内メソジスト教会の外国人宣教師と神について語り、詩を書いて生きがいとした。[8]」〝現代思想より見たる神―神に対する科学的接近〟というホームズ宣教師の話を阿部倹司が日本語訳したものが残っている。

ホームズ宣教師と、福井中学英語科教員との写真も残されている。福井中学の授業にもホームズ宣教師は参加していた。[9]

## 八　福井新聞に見るホームズ宣教師の活動

信者の子供たちから父親の飲酒の相談をよく受け、ホームズ宣教師は福井新聞で数回にわたって禁酒のすすめに関する記事を掲載している。[10] ホームズ夫人が幼稚園教育の中で禁酒を子供に教えることと連動して、市民にはホームズ宣教師が禁酒運動の普及に尽力した。禁酒問題研究会の発足と酒の害を科学的に訴える説明は、教会内部を超えた市民・県民への強いメッセージとなっていった。ホームズ宣教師は一九一四（大正三）年の着任以来、自身の子どもを通じて市民と親しむ機会も多く、新聞に連載を依頼されるほどに周知されていた。福井着任十一年目の一九二五（大正十五）年十二月十九日には、「吹雪の夜 南國の話」との見出しで、十七日夜にホームズ邸で二十一名が参加した火曜倶楽部が開かれたこと、翌年の二月で発足一周年になることなどが掲載された。さらに「國際連盟とクリスマス」（十二月二十三日）と題する記事も福井新聞には記載がある。また、グリフィス福井再訪が決まった頃には「心の異端に就て」と「神を知る法」をそれぞれ五回の連続記事が福井新聞の表紙一面に連日掲載されている。[11]

## 九　“Friendship”（友誼またはデモクラシー）

ホームズらが主催している火曜倶楽部へのグリフィス訪問は、最初から福井市の滞在計画にはいっていた。[12] グリフィスがホームズ宣教師と何をはなしたか。グリフィスの日記によれば、一九二七（昭和二）年四月二十八日午後四時五十分、江戸町のホームズ宅に到着し、火曜倶楽部有志主催の夕食会に出席した。火曜倶楽部とは社会生活の向上と改善のための会で芸者は入ってなかった、午後七時半より同所で開かれたお茶会に臨み、午後八時宿舎である名和屋旅館にもどっている。[13] 五十年以上前の若き日にすごした福井が、これほど温かく自分を歓迎してくれたことに感謝し、ホームズ宣教師の上にも神のご加護があり福井での福音伝道にますますの繁栄を激励されたこととおもう。

そもそも異国の地にうまれ、違う言葉を話す国にやってきてキリストの福音伝道に人生の大半をささげるということはどういうことなのであろうか？　グリフィスが福井に来たのは、教え子の日下部太郎のふるさと、「井戸の中に福がある」場所として日下部より紹介された福井を見たいという気持ちもあったであろう。

一方、ホームズ宣教師はどうか、違う言葉・違う外見・違う風習ではあるが、人間同士かならずわかりあえるはずだというゆるぎな

い確信がなければそうはならないであろう。山下英一によれば、グリフィスは、フィルモア大統領のいうFriendship（山下は友誼という訳をあてているし、デモクラシーといってもいいのだと語っている）がなにより人間理解には大事であって、友誼をふかめれば戦争ということは発生しないと考えていた。実際、当時の福井新聞よりグリフィスの福井での演説の一部を引用する。グリフィスは世界の大勢を論じて以下のように述べている。「日本は東亜における覇者として立ちアメリカは欧州列強の首班として太平洋の彼方に隆盛を見る事と信ずる東西両国が太平洋を真ん中にして一層の親善を図ることは世界平和の上に幾多の貢献をする事と思われる」[14] グリフィスは日本でもアメリカでも同じ考えで各地を講演し、Friendshipの大切さを説いて回った。このような思いは、当然ホームズ宣教師の中にもあったとおもわれる。

## 十　ホームズ宣教師の息子（ジョン ホームズ）の福井の印象

ホームズ一家の子供は三人いて長女ルース・エレン、長男のチャーリー、次男のジョンがいた。ジョンは一九一八年福井で生まれ、カナダの学校へいく一九三六年まで福井でそだった。ジョンは両親が四十歳代を過ぎてからの子であり、また福井は安全な場所であったため、姉兄と違い自由にあちこち歩きまわることができた。宣教師宅の調理人をしていた穴田にはジョンと同じ日生まれの子供の茂がおり、ジョンと茂は双子のように育って自由な幼年時代をすごした。周りには、家族以外に西洋人の子供はおらず、幼少時代ジョンは不思議に思っていた。どうして自分は、ほかの子供たちと見た目が違うのか？友達とも自由に日本語（福井弁）をしゃべっている彼は、よく質問をうけた。「君の眼が青いのは病気なの？」「目は青いけれど、心の魂の眼の色は、みんなとおなじ黒色さ」と答えていた。魂に目があるかわからなかったが、早く質問を終わらせたい気持ちでジョンは答えていた。

ホームズ宣教師家族が住んだ宣教師館はとても広かったので子供二人のかくれんぼの遊び場となった。父の勉強室は立ち入り禁止であったが、ときどき入ることはあっていつもカビが生えて据えたにおいのする革製のジョン・ウェスレーの説教集を前に思索にふける父の姿を覚えている。[15]

〝宣教師の子供たちは、宣教師の親ほど文化的な孤立を感じるわけではないが、日本で生まれ育った外国人の子供のなかには、自分の存在に戸惑う感受性を持つ者もいた。ジョンもその一人である。宣教の大意を胸に来日する宣教師と違って、宣教師の子供は異国で生まれたことと異国からの受け入れに戸惑いやすい。宣教師の親たちは家の中では子供に西洋式の生活を教え込むものであるが、家を一歩出ればそこは日本であって、最初から日本で育っており家の外の環境に十分対応していた。乗り越えられない文化の違いに直面する宣教師たちはキリスト教の福音伝道を通じて西洋の伝統的な価値観を伝えようとし、宣教師の子供は見た目が違うという明快な違いにより社会的な障壁に直面するのである。[16]〟まさにジョンは福井生

まれの福井育ちで、カナダにいってからも、日本語を話し英語があまり上手じゃない自分という存在、どこにもなじめない自分に気づいている。また皆からすばらしいといわれていた広大なカナダの風景を見ても、皆がおいしいというカナダの料理にも違和感を覚え、遠い日本や福井についつい思いをはせる自分に戸惑いを覚える人生であった。

## 十一　ジョンの親友　穴田茂

グリフィスが福井再訪で訴えた海外との友誼を大切にする道を国家は選ばず、また日本滞在三十一年のうち福井で二十四年の長きにわたり福音伝道に従事したホームズ宣教師は、戦争の足音が近づき帰国をよぎなくされた。ジョンはカナダに行き、双子のように育った穴田茂は徴兵により戦争に参加することになる。穴田茂は、日華事変の際に兵長として出兵し北支で一九四〇年九月に二十三歳で戦死している。[17]双子のように育った二人が、ふたたび会うことはなかった。

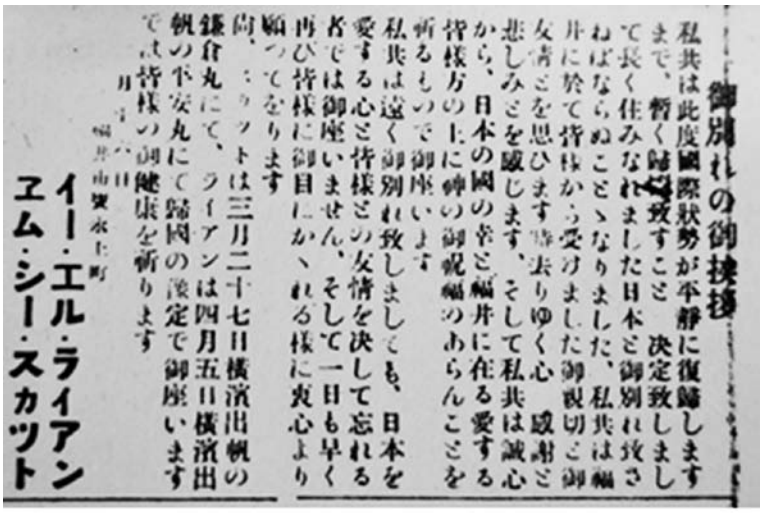
## 十二　一九七八（昭和五十三）年の出来事（福井新聞より）[18]

一九七八年四月十八日の福井新聞に次の記事が載った。福井市宝永上町九十六番地の洋館で生まれたジョン・W・ホームズさん（98 Flore Drive, Scarborough, Ontario州, CANADA）より福井新聞社に手紙がとどいた。父親は宣教師のC・P・ホームズである。戦争が始まるまで福井市で生まれ育ち暮らしたジョン・ホームズさんより、「私は六十歳を超え、もう日本を訪ねることができません。今では生まれ育った福井や北陸のことを、しょっちゅう思い出して懐かしんでいます。まるで親切にしてもらった土地への、ホームシックのようです」との便りが届いた。福井で受けた好意や共に過ごした同級生たちと話がしたいとの手紙の紹介があった。四月二十六日の福井新聞は、ホームズさんからの手紙に反響続々という記事が掲載された。「父のホームズさんは日本語がうまく厳格な人であった。当時の教会は一種の文化的サロンで、宣教師のホームズさんはバイオリンを弾き、教会にはオルガンも幻灯機もあった。旧制福井中学の学生が集まってサンサース・ショパン・ベートーベンのレコードを聴いたり本を読みあったりしていた。「金と人格は一致しない」とホームズ宣教師は常々語っていた」という。四月三十日の読者の声には、宝永光山写真館の光山香至さんが、『懐かしいホームズさん』として便りをよせている。「異郷の人が福井へ訪れた時はできるだけ素朴で温かみのある親切で迎えることが大切であろう。故郷というものは何年たってもいいものでありわれわれ人間はいつまでも故郷を愛し忘れないでいたいものだ。」と締めくくっている。五月二十七日の新聞ではホームズさんから福井からの手紙が届いたとの喜びの国際電話があったことが報告された。「日本語は話せないが、日本人の心を今も懐かしく思う。思い出はいっぱいあり、また便りを出したい」とホームズさんからのメッセージが伝えられた。

## 十三　福井の人が忘れてはいけないこと

私の家は、浄土真宗の檀家をしており、家で商売もしており店には神棚もあった。幼稚園はキリスト教の栄冠幼稚園で、だれもがみな「神の子」ですといわれ育った。毎朝仏壇にご飯をお供えするのは私の役目だったし、神棚の榊もお手伝いで定期的に買いにいっていた。ご飯粒を残そうものなら、おばあちゃんにお米一粒の中には十二の神様がいる、ばちが当たると説教された。晩年ますます信心深くなっていった祖母は、「かみさま・ほとけさま・ごせんぞさま、かみさま・ほとけさま・ごせんぞさま、今日もおみまもりいただきありがとうございました」とあちこちにお祈りしていた。それをみていた私は、神様はたくさんいてどこにも（お米の中にも）いるものだとおもっていた。幼稚園の神様も数多くの神様の一つと思っていた。

日本の開国とともに、異教徒の国に真の教えを伝えたいと世界中から宣教師たちがやってきた。北陸三県は、カナダ・メソジストミッションが主として伝道に入り仏教王国の中で、布教を始めていった。当時の志がうまく開花することなく対外環境の悪化とともに引き上げの判断をし、ホームズ宣教師一家は一九三七年にカナダに帰国し、栄冠幼稚園の園長ライアン女史らの一九四一年の帰国を最後に福井でのカナダ・メソジストミッションの伝道活動は終了した。昭和十年代に教会関係者がうけた妨害や迫害について栄冠幼稚園の赤阪英夫元牧師が記録を残しており、福井の人はどんなことがおこっていたかどんな時代であったか再度胸にとどめる必要があるであろう。[19]



御別れの御挨拶

私共は此度國際狀勢が平靜に復歸しますまで、暫く歸國致すこと　決定致しまして長く住みなれました日本と御別れ致さねばならぬことゝなりました、私共は福井に於て皆様から受けました御親切と御友情とを思ひます　去りゆく心　感謝と悲しみとを感じます、そして私共は誠心から、日本の國の幸と福井に在る愛する皆様方の上に神の御祝福のあらんことを祈るもので御座います

私共は遠く御別れ致しましても、日本を愛する心と皆様との友情を決して忘れる者では御座いません、そして一日も早く再び皆様に御目にかゝれる様に衷心より願つてをります

尚、ミラクトは三月二十七日横濱出帆の鎌倉丸にて、ライアンは四月五日横濱出帆の平安丸にて歸國の豫定で御座いますでは皆様の御健康を祈ります

月　日　福井市東京本土町

イー・エル・ライアン
エム・シー・スカット

福井新聞　一九四一年（昭和16）年３月17日

〃御別れの御挨拶

私共は此度国際情勢が平静に復帰しますまで、暫く帰国致すこと決定致しまして長く住みなれました日本と御別れ致さねばならぬこととなりました、私共は福井に於いて皆様から受けました御親切と御友情とを思います時　去りゆく心は感謝と悲しみとを感

じます、そして私共は誠心から、日本の国の幸と福井に在る愛する皆様方の上に神の御祝福のあらんことを祈るもので御座います

私共は遠く御別れ致しましても、日本を愛する心と皆様との友情は決して忘れる者では御座いません、そして一日も早く再び皆様にお目にかかれる様に哀心より願っております〟[20]

これは一九四一（昭和十六）年三月に福井よりカナダミッション最後の帰国者となったライアン女史らが、福井新聞によせた別れのあいさつ文である。ホームズ宣教師も同じ思いを抱いての帰国であったこととおもわれる。その後ライアン女史が来日することはなかった。

多くのカナダの人たちが福井を愛し伝道と教育のために祈りつくしてくれた事実がある。戦争は多くの人の人生をかえたが戦争の記憶は遠くなり、まして戦前の大正からの昭和にかけて二十四年間福井で福音伝道を続けたC．P．ホームズ宣教師一家のことを思い出す人は少なくなるだろう。

ホームズ宣教師や子供のジョンにとっては、福井は忘れがたい土地でありまた故郷そのものであり、ホームズ一家を、温かく迎えた当時の福井の人々の優しい気持ちの一端にふれることは意味あることと感じる。福井で若き日を過ごしたグリフィスのその後の人生は、日本の本当の姿を世界に誤解なく伝えることにあてられた。グリフィスやホームズ宣教師の人生を通した行動は、たとえ宗派は違えどもとても立派でしっかりとした揺るぎのない信念に支えられていた。

## 十四　ホームズさんの白髪と笑顔は、福井の人々の記憶から永遠に消えることはないであろう

JAPAN CHRISTIAN YEAR BOOKでのホームズ宣教師訃報の日本語訳をあげて終わりとする。[21]

〟チャーリー　パーソンズ　ホームズ

神学博士であり文学士でもあるホームズ宣教師は、一八七五年十二月二十五日カナダ、オンタリオ州オックスフォードで生まれ、賜暇休暇中の一九三八年月七月六日トロントにて生涯を終えた。

伝道活動四年間ののちトロントとビクトリア大学で学び、トロント大学では美学、ビクトリア大学では神学をおさめ卒業した。彼はカナダ・メソジスト教会より日本での宣教を託され、一九〇六年十二月十日に東京に到着した。短期間日本語を学んだ後、静岡に一年その後賜暇休暇の一九一三年まで浜松で宣教した。一九一四年に日本にもどってからは、福井で伝道活動は二十三年（ママ）の長きにわたった。

十四歳の時に紛うことのない神の啓示を受け、その経験が彼の伝道活動の起点となった。

彼はまさに伝道者そのもので、カナダの二か所の巡回伝道では、聖霊の大いなる普及につとめ、実に多くの人の心を打ち、信者を増すなどめざましい実績をあげた。彼の人々の心に働きかける伝道の熱心さは、浜松や福井で牧師を見出す活動や普通の労働者への伝道活動でも変わることはなかった。彼の伝道を目にした人は皆、〟町

中であっても田舎であっても熱意を込めて伝道し、周到な準備を怠ることなく特に未開の地であっても、多くの人の心を開くために苦労をおしまなかった〟彼の姿を見ている。彼の人生は伝道者として人生であったが、学問をする人でもあった。福井の学校で使用している倫理に関する多くの本を読み翻訳している。また仏教についての理解にも力をそそいだ。このようにして回りの人の理解を深めていった。一連の仕事は、ハリフォックスにあるパインヒル大学に認められ、神学博士の称号を授与されている。

彼は、オックスフォード・グループ・ムーブメント、（別称　道徳再武装運動）にも共感を示していた。この運動では、人生を変えるきっかけというものは、若き日の啓示とおなじことであるが、その形式と方法が違っている。彼は自分の教会の中に次なる種が育っていることに喜びを見いだし、彼の仕事はこのグループムーブメントからも強い影響を受けた。

彼には周りにいる誰ともすぐ仲良くなれる才能があり、多くの人に愛された。たえず相手に気配りをして、無理な要求はせず、援助もいとわず、敵を許し、決して労を惜しまなかった。旅行の時はいつも三等車を使い、多くの人とかかわりを持とうとした。彼は福井の地に大いなる種まきをおこない、それらはやがて大いなる恵みをもたらすであろう。ホームズさんの白髪と笑顔は、福井の人々の記憶から永遠に消えることはないであろう。〟

ホームズ宣教師　還暦ごろの写真

謝辞　私のつたない歴史研究を温かく見守りいただいている山下英一先生には、事前に拙文をご高閲いただきアドバイスいただきました。ありがとうございます。左上の写真は、ホームズ宣教師の孫が、geni.com に二〇〇七年に載せたものであり、孫の Robert Charlie Holmes にメールにて使用許可を得るも連絡つかず、著作権法の範囲内で使用可能と筆者判断し掲載した。ホームズ宣教師六十歳前後の写真であろうとおもわれる。座布団に正座の上、扇子をもっているところは日本びいきであることがわかる。

**参考文献および参考サイト**

（1）『グリフィスと福井　増補改訂版』　山下英一　二〇一三年
（2）『かみさまありがとう』栄冠幼稚園　七十五周年記念誌（日本基督教団神明教会１９８３年）p.142-143
（3）"The Missionary Gang" Toronto to China Acta Victoriana 30: 65, (1907), p.291
（4）山森泉 児玉衣子「北陸地方のキリスト教保育史　ＪＫＵ年報からの翻訳と解説（4）」『北陸学院短期大学紀要』二〇〇七年
（5）The Cross and the Rising Sun: The British Protestant Missionary

Movement in Japan, Korea and Taiwan, 1865-1945（Christian Mission Evangelism）A. Hamish Ion（二〇〇九年）p.149
（6）THE NEW CHIVALRY IN JAPAN METHODIST GOLDEN JUBILEE John W.Saunby（一九二二年）p.276-288
（7）〝教会略記〟シ・ピ・ホームス『歩みの跡：日本メソヂスト福井教会創立四十周年記念誌』岩井薫（日本メソヂスト福井教会　一九三四年）p.57-59
（8）阿部倹司（川上高）遺稿詩集『死と生のあいだで』阿部莉江子　二〇一八年
（9）福井県立藤島高等学校『創立百五十周年記念写真集』二〇〇六年
（10）山森泉「北陸地方のキリスト教保育史　ＪＫＵ年報からの翻訳と解説（7）」『北陸学院短期大学紀要』二〇一三年
（11）福井新聞　昭和二年一月二十一日、三月六日
（12）福井新聞　昭和二年一月二十七日
（13）グリフィス・コレクション（グリフィス文書目録稿）J-145 福井大学（ネット上で閲覧可能）
（14）山下英一「グリフィスとその時代　１９１０―２０年代の日本と米国」『若越郷土研究』第四十四巻一号（一九九九年）p.1-12
（15）The Cross in the Dark Valley: The Canadian Protestant Missionary Movement in Japan A. Hamish Ion（一九九九年）p.189
（16）The Cross in the Dark Valley: The Canadian Protestant Missionary Movement in Japan A. Hamish Ion（一九九九年）p.192
（17）The Cross in the Dark Valley: The Canadian Protestant Missionary Movement in Japan A. Hamish Ion（一九九九年）p.193
（18）福井新聞　昭和五十三年四月十八日、二十六日、三十日、五月二十七日
（19）空襲前後のおける福井市のキリスト教徒　赤阪英人『福井空襲史』（一九七八年）p.640-643
（20）福井新聞　昭和十六年三月十七日
（21）OBITUARY: Charles Parsons Holmes JAPAN CHRISTIAN YEAR BOOK（一九三九年）三十七巻 p.315